

堀調査せられ東亞の考古學界に多大の刺戟を與へるものがあつた。本墳は此等に先行して發掘せられ今までの調査報告に接するものであるが本墳が家族墓として構造され、其の埋葬當時の状態を保存することに於いて就中裝身具の狀況を知るに最も貴重なる資料を與へてゐる男子の金冠、純金耳飾(太輪)頸飾(青色)銀指環、銀銚帶金銅沓、環刀太刀、に對し婦人には寶冠(樺皮製銀前立附)耳飾(細輪)頸飾(色彩に富む勾玉、切子玉、空玉等)銀釧、腕玉、銀銚帶、金銀裝刀子等であつて、互に共通するもの以外には性別によつて加作されてゐる。而して本墳は古新羅時代の西曆六世紀前後のものに認められ、慶州に點在するものと同様の墳築をなすものである裝身具の副葬状態を明らかにすることに於いて基本的例示を與へるものと云へる。精細なる圖版は本文を補充するに餘りあるものがある。(四六四倍版本文八六頁、圖版四十一葉)(以上島田)

●日本民家史

藤田 元春著

從來専門學者の研究對象とした我國の建築史は、宮殿樓閣にあらずんば神社寺院乃至は大名屋敷であつた。それらのものは、或は實物の現存するもの多きにより、或は文獻上に於ても相當の史料を残して居るので、その研究はある程度までは容易であつた。之に反して、吾人の生活に最も深き關係を有する民家の研究に至つては、民家そのもの、性質上二三百年以上の存在が稀であるのみならず、文獻の上に史料を求める事も容易ではなく、從つて建築史家の視界からは疎外されつゝ、今日に及んだものである。然るに近時、史界の傾向につれて、農村の研究が重要視さるゝに至り、民家の如きも漸く學者の視野に映じ來るに至つた。

著者は人文地理專攻の學者であつて、民家の研究に思を潜める事十年、殆んそ全國に亘つて實地を尋ねる傍ら或は古文書に、或は繪畫に、或は發掘品に、民家に關する資料を涉獵しこれを諸外國のそれと對照して茲に一卷の書となし、世に問うたのが本書である。

第一篇では、屋根の形態並びに葺方を細説し、第二篇

では民家の間取を妻入住宅ミ平入住宅ミは分けて説明し
第三篇では家作の變遷を古今に亘りて概観し、更に第四
篇に於ては、宅地にも言及して居る。而して全篇を通じ
て殆んミ毎頁に平面圖や寫眞を挿入し、その數二百五十
有餘に及んで居る事を以て見ても、著者の苦心を偲ぶべ
きであるが、更に隨所に見ゆるその見識は、吾人に何物
かを考へしめるものが多くある。例へば瓦の起源を論じ
支那に於ても印度ミは獨立に埒の如きものを屋上に載せ
る事に因由して發生したらうとした事、竈を論じてその
原始的信仰の今日なほ遺存せる事を認めた事、民家三間
梁の制限は、單に我が國に於てのみの法度でなく、少く
とも唐代の法制に基くものであらうと言へる事、本邦宅
地平均面積を明治十六年ミ大正十三年ミを比較して地圖
上に現はし以て地方文化の進展、並びにその速度を暗示
した事等杯一々擧ぐるに違がない。只本書を通讀して吾
人の稍淋しく覺ゆる事は、屋根・間取等に就いての一人
の説明の外に、それらの特異性が地方的に印附けられて
ないこと、またその地方的特異性ミ其地方の天然現象乃

至人文的環境との關係如何等の點を、農民の社會的地位
によれる民家の差異を説いた程度に、或はそれ以上に、
少くとも一節を設けて要約してないことである。しかし
あの多數の挿入圖や藝術的な口繪寫眞や、著者數年の辛
苦を熟知する私は、それを望む方が却て無理かも知れな
いと思ふ。(菊版六〇三頁、價八・八〇、刀江書院發行)(中
村)